

曲面の表情

An Expression of the Curved Surface

小林 伸好

KOBAYASHI Nobuyoshi

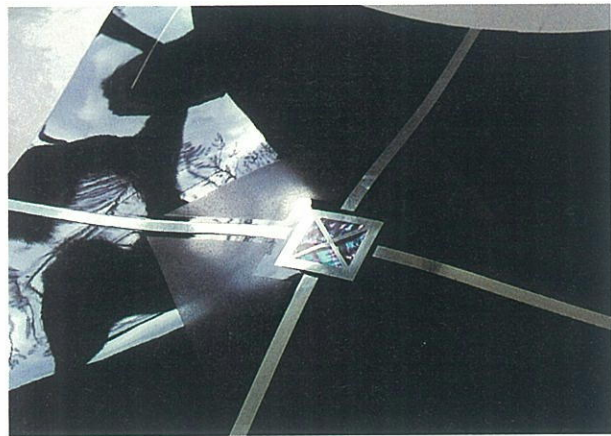
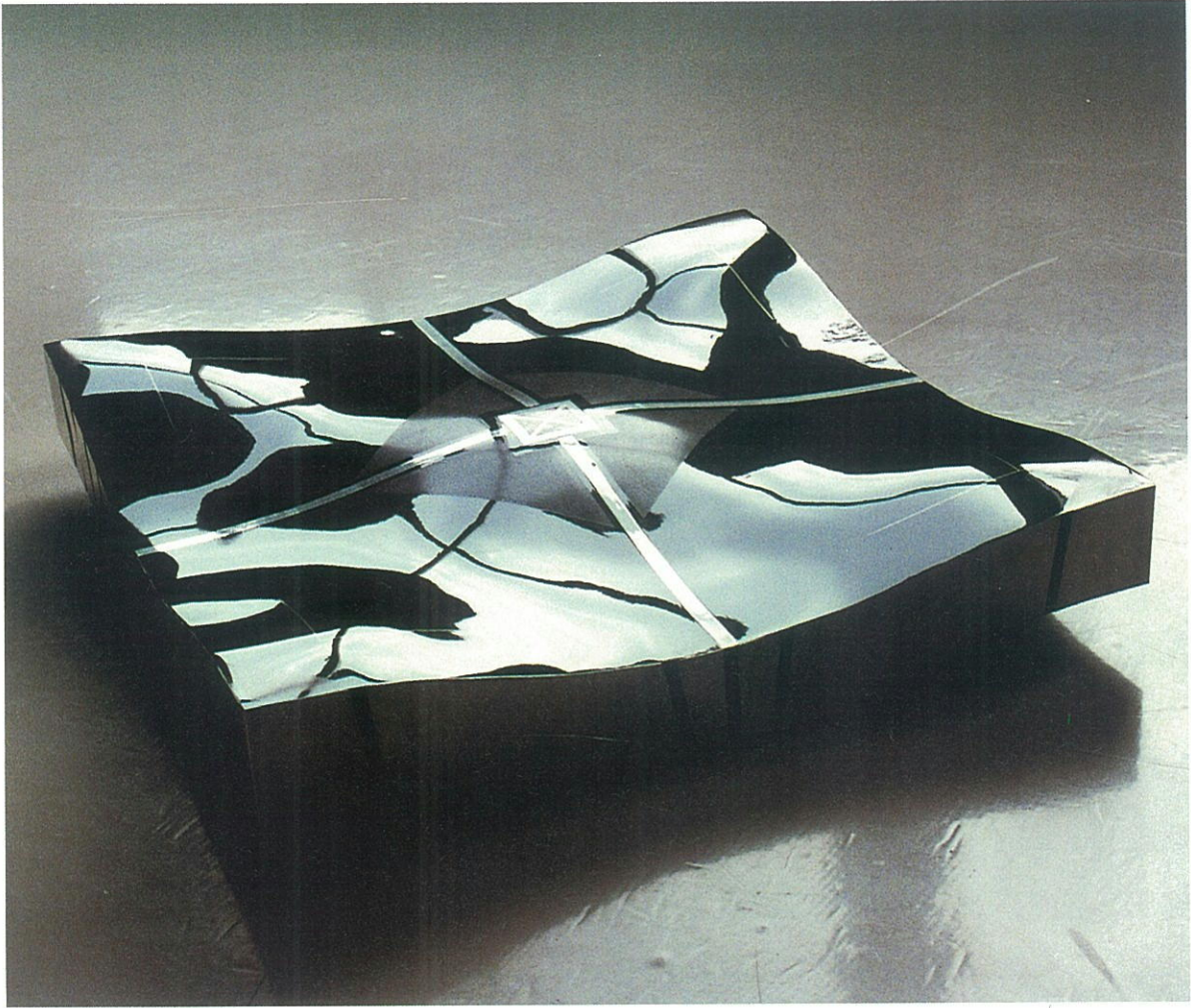
ここ数年の間に縄文時代とされる遺跡から黒や朱の漆塗りと思われる木器や土器が数多く発掘され、数千年前から漆の樹液を塗料や接着剤として利用する知恵を古代人が熟知していたことに改めて驚かされ、その耐久性に感心する。漆の素材や技術は先人達の長い蓄積が今日まであり、その時代、時代の感性が重なり、物として表現されてきた。どの時代であっても漆液そのものだけでは、作品としては成り立たない。形態は常に創作の出発点になるのだが漆はその特性から塗膜の質感や色、蒔絵に代表される加飾が意識され作品として表現されてきた。

漆とは何なのか？

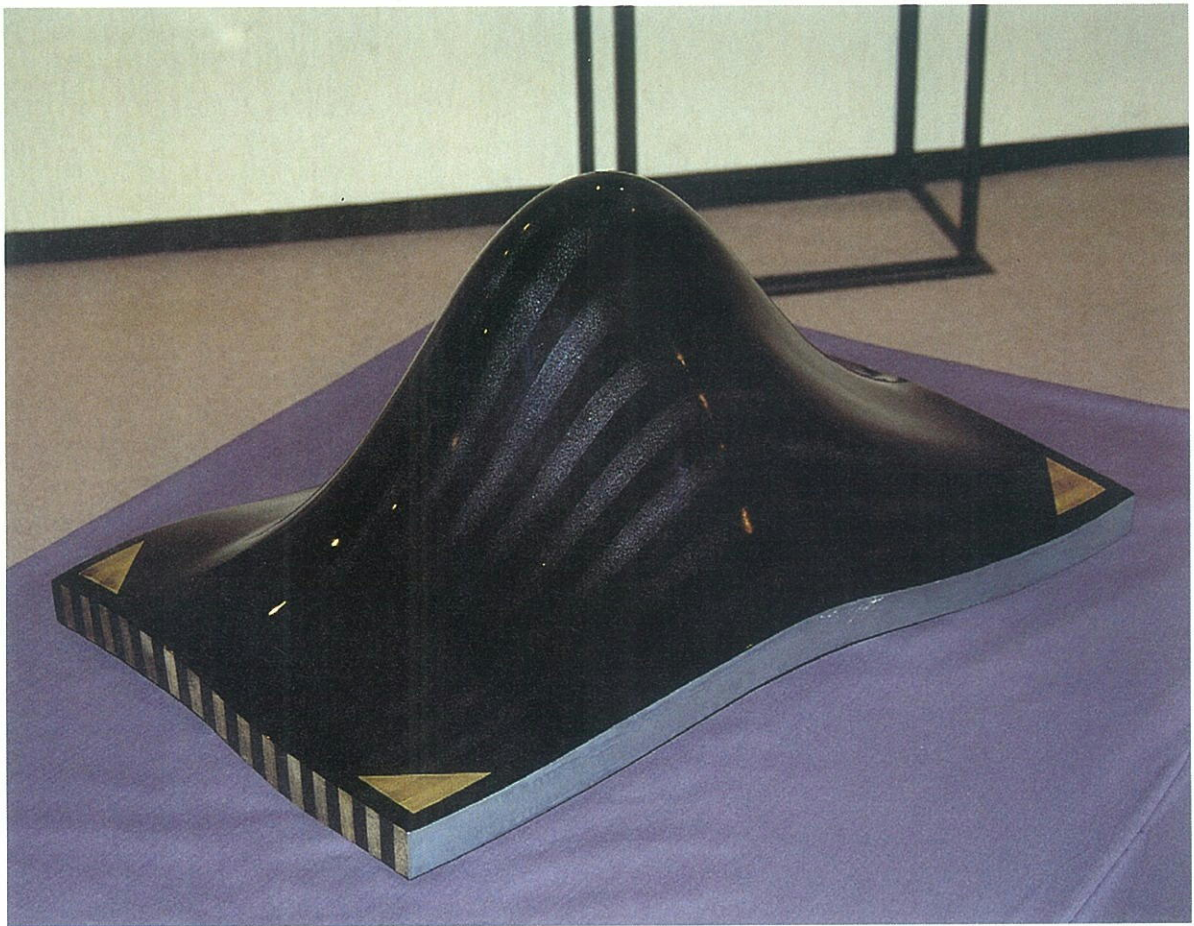
工芸とは、素材や技術とは？

そして、時代とは？

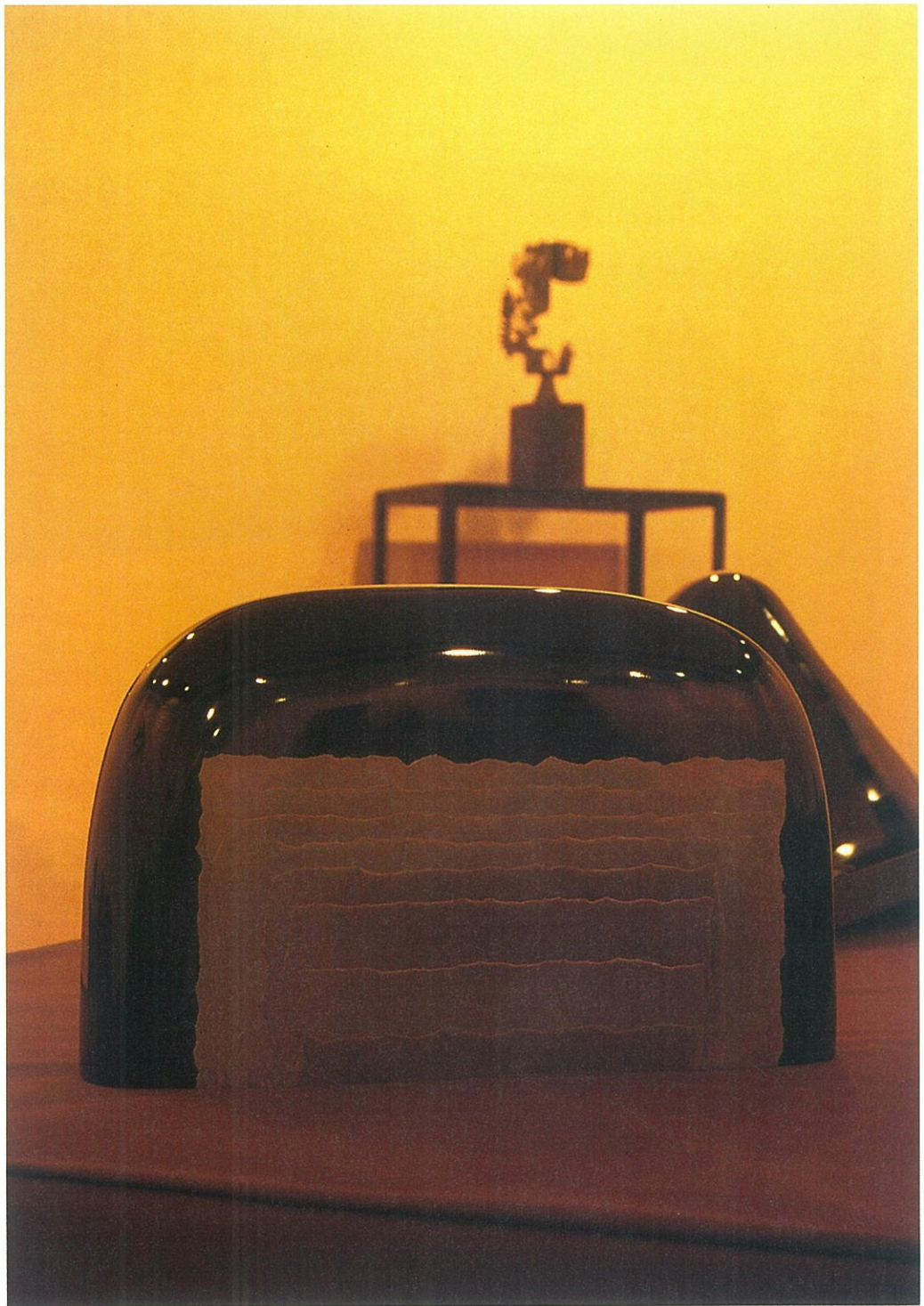
物を創作しながら常に頭の中をこれらの問いが駆け巡る。漆の黒や朱を想像しながら形態を模索し、形態を模索しながら漆の艶やかな塗肌を想像する。空間と作品との境界である漆の面を常に意識する。ある時は水平線のようにどこまでも平らな面を、ある時は、風のような、波のような柔らかな曲面を想像し、漆の肌合いを造り込む。すると、漆が形態に塗られた塗料の表面では無く、作品の内側から漆そのものに変化してくるようになってくる。空間との境界である曲面を黒く、青く、朱に、蒔絵を螺鈿を表現する。そして、漆の作品を制作するゆったりとした時間の流れの中で過去、現在、未来を想像し、今の自分を確認する。



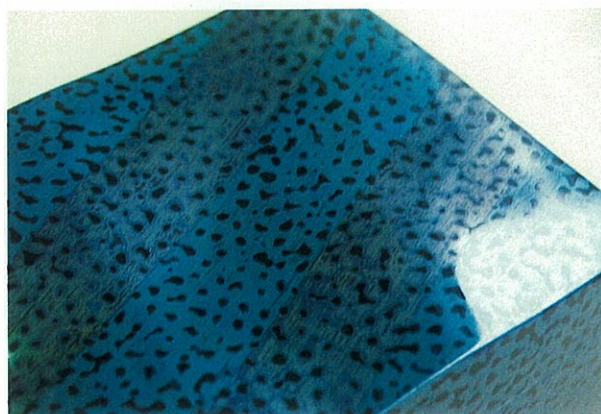
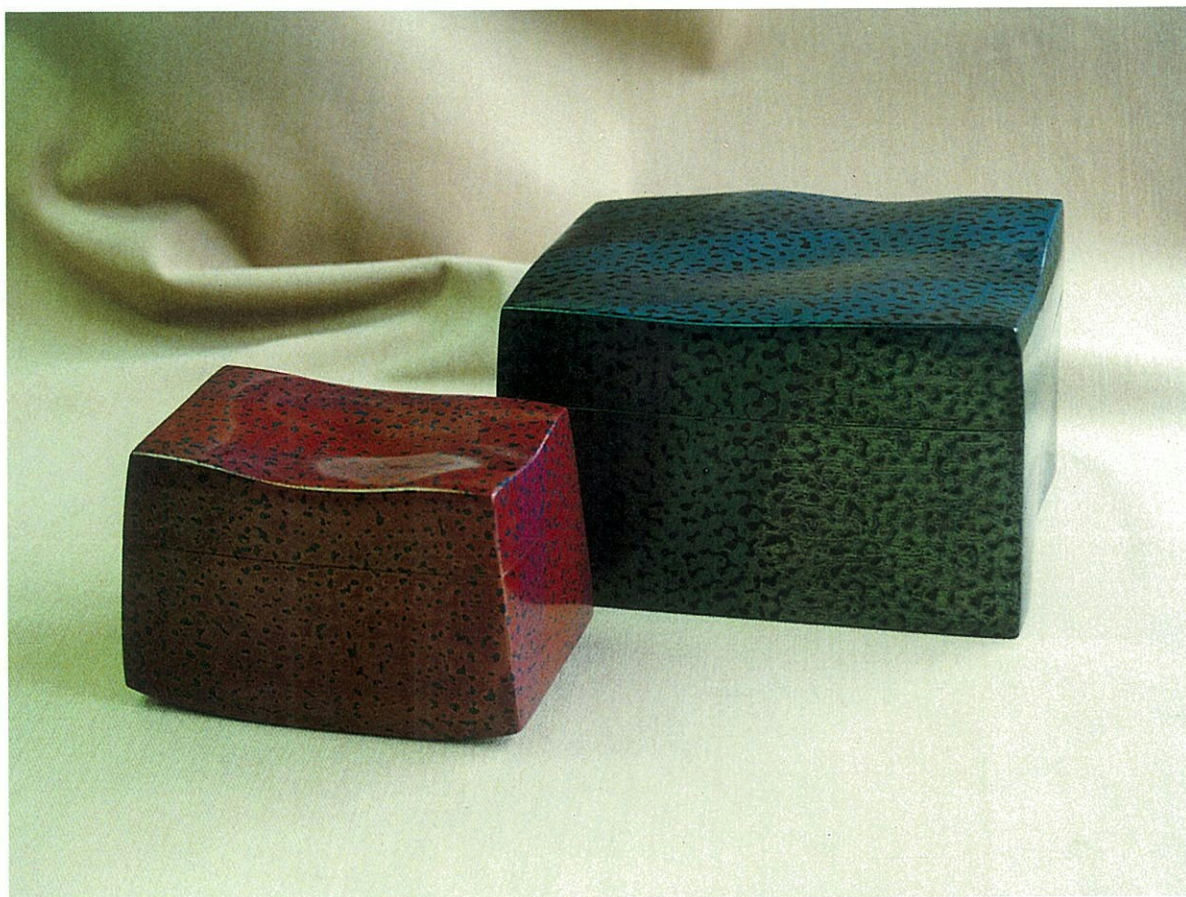
「Cubic Wave」 910×910×120mm 乾漆・アルミ



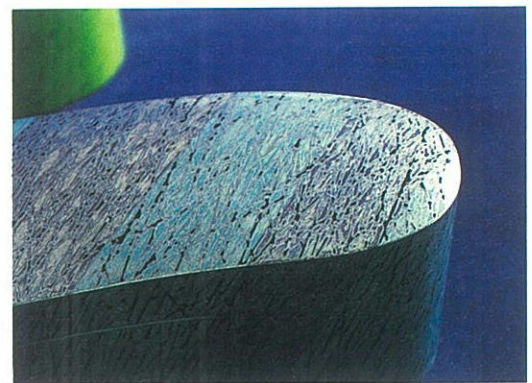
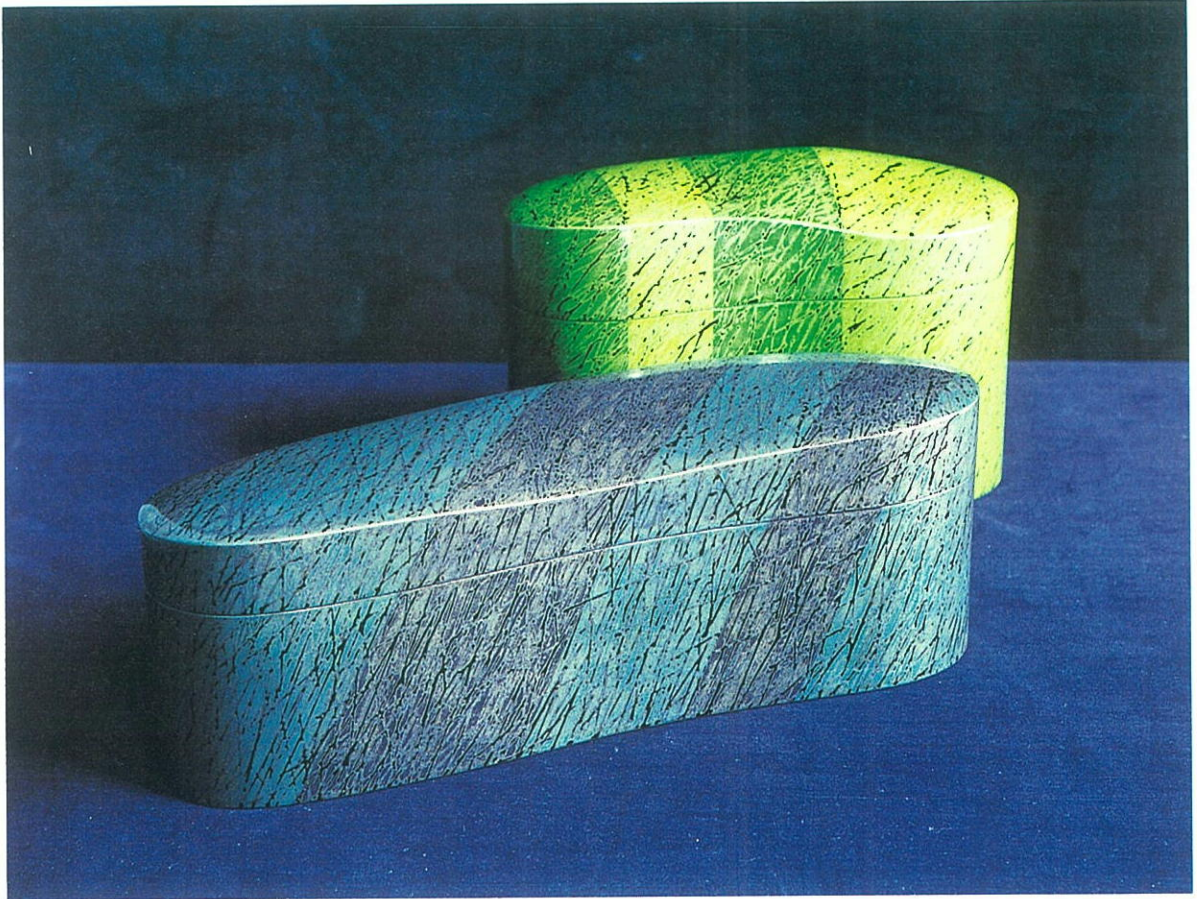
「Wave」 810×520×420mm 1993 木心乾漆・蒔絵・鉛



「Wave」 460×120×285mm 1993 木心乾漆・鉛



「歪んだ箱」 156×192×115mm 1991 乾漆・変塗
90×143×84mm 1991 乾漆・変塗



「曲げられた箱」 115×280×165mm 1992 乾漆・変塗
105×375×140mm 1992 乾漆・変塗